
日本の武道文化の成立基盤—新陰流と一刀流剣術の研究を通じて

研究代表者 魚住孝至
共同研究者 立木幸敏（学外） 大保木輝雄
研究協力者 吉田鞆男 仙土克博 朴 周鳳 中嶋哲也 長南信之
（* 埼玉大学 ** 国際武道大学研究所客員研究員 *** 古流剣術研究会
**** 早稲田大学 ***** 国際武道大学大学院研究生）

I. 2011年度プロジェクト研究の概要

本年度行った研究の概要、調査、成果一覧を報告した。本年度は、魚住と立木が、新陰流流祖の上泉信綱の出身地の群馬県前橋市上泉にある西林寺（大山誠一住職）と、米沢市在住の末裔の上泉一治氏宅を訪れ、調査して関係資料を収集した（研究成果はII）。

II. 上泉武蔵守信綱研究覚書（魚住孝至）

先行研究では史料批判が十分でないので、史料を上泉発給文書と直接関係する1次、周辺人物の2次、末裔・流派伝承の3次、軍記・編纂物の4次に分類し、成立年代・情報源に留意し、確かな史実とも照合して考察した。上泉は16世紀初頭に上州上泉の国人領主の家に生まれ、若き時より剣術・兵法を修めたが、永禄6年（1563）頃、箕輪落城前に上洛、将軍の台覧も受け、新陰流を畿内に広めた、同9年の影目録4巻に拠って、その思想を論じた。同12年には「従四位下」に叙されたが、将軍の奉公衆となった故か。叙任名簿の傍注により天正元年（1573）没と見られるなど、新たな上泉論を展開した。

III. 新陰流の“砕き”についての続報 「二十七箇条截合」と「試合勢法」について（吉田鞆男）

新陰流目録にある「二十七箇条截合」については、その仕様を書いた古文献はないが、江戸後期の長岡房成手記に拠って、新陰流の表の勢法を変化させて吟味する“砕き”だと論じた（本年報第15号）。本稿はその続報で、房成が制定した尾張柳生家の「試合勢法」や江戸の柳生宗矩の弟子の鍋島家伝書の勢法などから、勢法を様々に変化させた“砕き”の実際を具体的に術技として示した。勢法は“範例”であって、実際の勝口を吟味する中で“砕き”がなされていたこと、「二十七箇条截合」の「序」・「破」18本には“砕き”が見られるが、最後の「急」では相手がどう打ってこようが、真っ直ぐに打ち下ろし、太刀使いを昇華する形が見られる。このように流派の形が範例であって、たえず“砕き”で吟味され、最後には太刀使いを昇華するのは、一刀流にも見られることであり、流派の剣術が、截合を超えて武士の覚悟を示すものであったことを表している。

【キーワード】 武道文化、剣術、流派、新陰流、一刀流、砕き、上泉信綱

現代武道の諸問題 V —国内における武道の現状と問題点 その2—

代表研究者：柏崎克彦（国際武道大学）

共同研究者：魚住孝至 大矢稔 松尾牧則 立木幸敏 井下佳織 矢崎利加（国際武道大学）

木村恭子（国際武道大学客員教授）

アレキサンダー・ベネット（関西大学） 金野潤（日本大学）

山田利彦（了徳寺大学）

我々の研究グループは、これまで武道が国際化する過程の中で生じた問題を掘り起し、各武道の壁を取り除きその対応の是非を論じてきたが、前回からは視線を国内に向け国際化の波や時代の流れがどのような形で国内の諸武道に影響を及ぼしたのか論じることとした。

今回は、前回浮き彫りとなった諸問題の中から、それぞれの武道で今直面している主要な問題の一つのテーマを抜き出し焦点を絞って論じてみたい。

まず、1. 柔道では、中学校武道の必修化をふまえ「柔道の安全指導」について論じる。2. 剣道では、学習指導要領の「目標及び内容」の「態度」ならびに「知識、思考・判断」の項の「相手を尊重する」「伝統的な行動の仕方」「武道の特性や成り立ち」「伝統的な考え方」の下支えになっている剣道の捉え方や考え方について論じる。3. 弓道では、特に「環境問題」に焦点をあてる。4. 空手道では、中学校保健体育授業としての空手道指導における安全管理について述べる。5. 合気道では、合気道における安全指導について論じる。6. なぎなたは、用具について発展の経緯と安全性に焦点を当てることとした。

【キーワード】 柔道の安全指導 剣道の伝統的な考え方 弓道における環境問題
空手道の安全管理 合気道における安全指導

「武道健康論」研究 —健康生成論と伝統的身体論を手掛かりに—

代表研究者 小林 啓三（国際武道大学）
共同研究者 田邊信太郎、石塚 正一（国際武道大学）
小林 正佳（天理大学） 阿久津洋巳（岩手大学）

武道と健康の関連を追求しようとして、伝統的健康論、舞踊論（宗教学）のほか健康生成論の分野から数年にわたって行ってきた研究成果を再度見直し、総括的討論として、課題と展望などについて検討した。

伝統的健康論の分野では、「健康」の具体的状態や確認手段などの実例をあげ、根底にある生命観・身体観について論じた。方法的課題として、質的なものと数量化になじまない「健康」の記述方法について、第三者の解釈を経た言葉よりも、実践者・体験者の発する言葉・表現をまずはそのまますくい取ることの重要性などについて言及した。しかし、今回は、関連する補足ややや詳しい紹介を行ったものの、今後掘り下げていくべき対象は広く深いものであることに、改めて思い至るとともに、近代的知識に置き換えてしまう理解の仕方や対象化して捉えることから抜けきることの難しさを再認識した。

舞踊論（宗教学）の分野では、健康の最終的な目的である「健やかさ」の回復を目指した武道教育について論じた。現在特に論じられている武道教育の実施に際しては、武道の特性や武道が持っている独特な身体技法（武道的身体）を理解することによって、はじめて有意義性を有するものであることを論じた。

健康生成論の分野では、この論の中核をなすSOCとの関連から、武道実施の目的の違いがSOCにおよぼす影響などについて、自然科学的立場と心理学的立場からの解釈と課題を指摘し、今後の方向性について論じた。

【キーワード】 武道と健康 伝統的健康論 武道教育 健康生成論

明代における武術の諸現象に関する研究 — 剣法・雑多な兵器・少林武術・武術著書・武科学を中心に —

代表研究者 林 伯原（国際武道大学）

共同研究者 周 佩芳（静岡大学） 野田昭彦（国際交流基金）

原田直之（前橋赤十字病院） 林 一周（JAL ホテルズ）

今年度のプロジェクトの内容を要約すると以下の通りである。

1. 「明代剣術の実態及び遺失剣訣・剣法の収集」では次の三点に関して考察した。①民間における剣術の流行とその実態。②嘉靖以前に遺失した剣訣・剣法の収集については、「剣訣」及び「剣法図譜」を題材に考察を行った。まず唐順之の『武編』と茅元儀の『武備志』に収録されている「剣訣」と呼ばれる作品について、その刊行時期及び特徴を検討し、次に「剣法図譜」の成立時期と各種勢法の特徴について考察した。③呉叟の『手臂録』に記されている「剣訣」と「後剣訣」を解釈した。
2. 「雑式兵器と十八般武藝に見る民間武術の変遷」では、主として次の二点を考察した。①多様な雑式兵器の発達とその変遷。②十八般武藝の定義に見る民間武術の変遷。明代になると「十八般武藝」の中心が明らかに民間武術に移行し、特に「綿繩套索」と「白打」が取り入れられたことは、取りも直さず民間武術が飛躍的な発展を遂げ、且つその内容が時代と共に絶えず変化していったことを反映している。
3. 「少林武術の興隆と民間武術への影響」では、明の時代に少林僧が訓練した武術の種類及びその特徴を明らかにし、また、当時、民間武術が大きく発展しつつあった状況下で、少林寺と一般社会の間で武術交流が頻繁に行われていた事実を指摘している。さらに、少林寺の僧が江南沿海で倭寇と勇敢に戦った歴史的事実を特に取り上げて紹介した。
4. 「代表的な武術家及び武術著書」では、『武編』『剣経』『紀效新書』『陣紀』『耕余剩技』『射史』『武備志』『手臂録』『太極連環刀法』といった代表的作品を選択して紹介し、その作品の成立時期、内容及び刊行や収録の状況などを示した。
5. 「明代における武科学と武学の発展」では、明代の武科学制度の変遷、試験内容の変化及び合格者の任官方式について明らかにし、また、武学における学生の資格、学習科目、試験、操練、昇格、賞罰等について検討した。

【キーワード】 剣法 雑式兵器 少林武術 武術著書 武科学

障害者による武道事例の調査研究 —富山県における空手道指導事例について—

松井完太郎 蒔田 実 柏崎克彦 高見令英 丸橋利夫 木村寿一 矢崎利加 井下佳織
アレキサンダー・ベネット* 阿部哲史** ポントス・ジョハンソン*** 中島 獅^{たけし}**** 濱田初幸*****
(* 関西大学 ** ブタペスト タンカプヤ仏教短期大学 ***ABCD スウェーデン
**** 国士舘大学 ***** 鹿屋体育大学)

2012年度から中学校武道必修化が始まる。障害を持つ中学生は、特別支援学校だけでなく、いわゆる普通の中学校にも入学している。どのように武道授業に参加させれば良いのであろうか。6年前に調査した富山総合支援学校におけるライ症候群の少年に対する空手道指導事例を再度調査し、その6年間の指導方法と変化の中にいくつかのヒントを見出した。6年間の進歩はゆっくり時間をかけたものであったが、少しずつ進んでいるにも拘わらず継続できる工夫が、指導者の思考方法と指導内容にあった。例えば「大きな動きから小さな動きへ、小さな動きから大きな動きへ」というアプローチが対象者の達成感とモチベーションを高めてきた。また、呼吸法指導に於ける、「ゆっくり吐く」と「速く吐く」の区別、叱るタイミング、稽古補助用具としての車椅子の工夫に特徴を見出した。確かに、障害者による武道研鑽事例が少ない現状では、指導方法に関する情報も科学的検証を支えるほどの事例数に欠け、因果関係の立証に至らない。しかし、これらの工夫が慎重にはあるが多様に参照応用されることで新たな事例が生まれるであろう。そして、この6年間の指導の中にあるヒントは、障害者指導だけに有効なものではなく、健常者指導にも活かされる内容が含まれている。中学校における武道授業では、限られた授業時間内で多くの初心者である生徒に対して成果を出す手法として参照応用が可能である。

【キーワード】 障害者武道 ライ症候群 中学武道必修化 包括教育 インクルーシブ教育

走運動の基本的な動きを身に付ける体育学習 —低学年における運動遊びの学習を通して—

長野敏晴

本研究の目的は、小学校第2学年児童を対象に走運動の授業実践を試み、基本的な動きの習得過程を明らかにすることであった。

本研究では、実験群を第2学年男女28名、統制群を第2学年男女28名とした。

児童の習得過程を、①走動作、②走タイム、の2点から分析を試みた。①走動作については、14項目からなる評価規準を作成し、これを基に50m走を4方向から撮影し事前事後で比較した。②走タイムについては、50m走と10mごとのラップタイムを測定しその変化を見た。なお情意面については、毎時間授業後に形成的授業評価（高橋2003）を実験群にのみ行い、毎時の変化を明らかにした。授業は、全8時間を配当した。

その結果、実験群において、走動作の評価規準14項目中12項目で有意な変化が見られた。また走タイムでは、20m－50m区間のラップタイムで有意な記録の向上が見られた。統制群では、走動作、走タイムとも同様の変化は見られなかった。実験群における授業前後の情意面にも有意な変化があった（ $p<.05$ ）。

【キーワード】 走動作 体育授業 第2学年児童 50m走 ぎこちなさ